

五島列島へ。 患者さまを訪ねる旅に出発!

大小の島々が点在する長崎県。人が住む有人島の数も、日本一とされています。

当院では開院当初より、五島列島など島在住の患者さまを受け入れています。患者さまの数は徐々に増え、8年前から毎年夏に、当院スタッフによる五島訪問を実施し、2泊3日で五島列島を巡ります。退院後、ご自宅へ戻られた患者さまの現状を拝見すると共に、

退院を控えた患者さまの病前生活についての情報収集や、退院後に向けた環境調査を主な目的としています。また、現地で入所中の施設や利用中の通所事業所などを訪ね、スタッフの皆さんへのあいさつや施設見学をさせていただいています。

2018年は栗原理事長をはじめとする総勢18名にて、8月2日から4日までの日程で五島列島へ。訪問

初日の五島市(福江島)での活動を中心に、取り組みの様子をご紹介します。

8月2日、出発日。晴天に恵まれた長崎港をジェットfoilで一路、福江港へ向かった訪問団は1時間半の船旅を終え、島に降り立ちました。ここからは病棟ごとと地域連携室の4グループに分かれて行動。患者さまが生活するご自宅、施設、病院など島内を回り、さらに午後からはスタッフ2名が船を乗り継いで、奈留島へ向かいました。

各グループは多職種によって構成されます。それぞれ出発前には、たとえば退院時の体の動きや食事、排泄といった身の回りの動作、



福江港ターミナル前で全員集合。ここからグループに分かれて訪問スタート。

家事動作など患者さまの状況を、電子カルテや入院当時の担当者より情報収集したうえで、訪問に臨みました。

九州最西端の島、五島列島を訪問!



2018年 五島訪問行程

- 8月2日 長崎港→福江港 福江島・奈留島訪問
- 8月3日 午前 引き続き福江島訪問→上五島へ
- 8月4日 午後 上五島・小値賀島訪問→長崎へ

退院されそれぞれの生活に戻られた患者さまとご家族の声に耳を傾けた3日間。住み慣れた地域でその人らしくいきいきとした暮らしを送っていただくために何が必要か、日頃の業務を検証する貴重な経験となった五島訪問の様子をレポートします。

特集

五島訪問 2018レポート

久しぶりの再会は

初日の午後、4階チームがお邪魔したのは、2017年12月に退院された患者様のご自宅です。介護されているご家族に、「ご家族は介護に対しての負担を感じていないか」「自宅のトイレで排泄できているか」「トイレの後に気分が悪くなることはないか」「日課としていた毎日のお祈りは続けているか」と、入院中に練習してきた事や、入院前の日課が継続できているか等、担当スタッフからの質問事項を確認。また、入院時の担当者が同行できなかったため、メッセージをしたための色紙をご本人へお渡ししたところ、笑顔になってくださったことがとても感動的でした。

別のお宅では、入院時は精神面が不安定だった方がその時のご自分について、客観的に話される姿に驚く場面もありました。

一方、課題を感じる場面も。患者

さまの中には「五島ではしっかりとリハビリをできるところが少ない」と話す方や、「昼間はやることがない」と話す方も数名いらっしゃいました。退院後どのように活動性を維持していくのか、現地の医療機関との連携を含めたフォローアップの重要性は、課題のひとつであり、特に上五島は訪問リハビリなどのサービスが不足しているように感じました。

当院では、上五島病院とWEBシステム「あじさいネット」を用いた遠隔でのカンファレンスを行っています。また現地訪問の折には、同病院の皆さんと情報交換会を開催。生活期スタッフも参加する中、当院へ紹介された患者さまについて急性期・回復期・生活期それぞれの視点から経過を報告し、情報を共有しています。

五島訪問を終えた今、思い出すのは入院中とはまたちがう、自然体の笑顔です。私たちが今後さらに取り組むことができるのはどんなことか。退院後の生活を想定した介護指導、退院時

のマネジメントなど課題はまだまだ山積みです。ご家族や地域の人々を巻き込んだ活動・参加の支援も考えなくてはなりません。

いずれにして

も住み慣れた地域とそこに暮らすご家族や友人たちの存在は癒やになるだけでなく、患者さまの可能性を引き出します。そんな目には見えない大きな力を感じ、改めて原点に立ち返ることができた3日間でした。



私たち2人は
奈留島へ
向かいます。



上五島病院との交流会の様子

離島からの受け入れ患者数
31名(2017年度)

訪問スタッフの内訳(2018年)

医師2名
看護師4名
理学療法士5名
作業療法士2名
言語聴覚士1名
介護福祉士1名
社会福祉士2名
事務1名

訪問した患者さまの人数
34名(2018年)(入院中3名含む)



お声掛けした時のこの
穏やかな表情に、私たち
スタッフも癒されました。



今後の取り組みに
活かせるよう
3日間がんばるぞ!

穏やかな 笑顔とともに

五島訪問を終えて

訪問終了後には病棟単位での報告会をはじめ、全職員を対象にした報告会を設け、訪問の成果とともに今後の課題について共有しました。

介護に専念するために仕事を辞めたご家族も。本人のペースに合わせて生活できるので介護が楽になったと笑っておられすごいなと感じました。五島ではリハビリができる場所が少なくとおっしゃる方もおられたので、退院後の自主練習などの提案も重要だと思いました。



一番印象に残っているのは、地域の特性に合わせて、ご家族が「頑張りすぎない介護」を実践していたこと。仕事との両立をやめ、力での移乗をやめ、家族のストレスが少しでも和らいだことで介護される当事者の方も笑顔が増えたとか。これには考えさせられるものがありました。こういう介護の方法もあるのだと、ご家族に提示することが今後できるなと思いました。



私たちが提案した内容に対し、地域の方から病前の生活をそのまま持続したいという希望が聞かれ、環境面を変更するつもりでしたが病前のままにしました。地元の方からその地域の特性や性格を細かく聞くことができるという点について、五島訪問に行かなければ分かりませんでした。

五島のサービス、リハビリなど社会資源について分からないことや患者さまの能力（歩行介助方法など）も伝えきれていない状態が多いと思いました。あじさいネットのような共有できる場を活かしていきたいです。

ご家族さまが患者さまのことや生活状況を、入院中に面会に来ている時よりも、実際の環境に沿って詳しく話してくださいました。

自宅への退院が困難だと考えていた方でも、地域のサポートを受けながら生活は可能であると感じました。ただ訪問リハなどのサービスは不十分であり、特にリハサービスが不足している上五島の患者さまのADL(日常生活動作)が低下している印象を受けました。

高齢夫婦お2人の生活であっても、五島ではごく普通のこと。「子どもが大きくなったら出ていくもの」と考える方が多く、色々考えながら頑張っているというケアマネジャーの話聞き感銘を受けました。困難なケースであっても、現地スタッフに相談すれば方法が見つかるのではないかと。そのためには、今回の五島訪問は顔の見える関係作りに大いに効果があったと考えます。

スタッフのことを思い出して涙を流す方もおられ、患者さまにとって当院での入院期間は非常に大きなものであることを実感しました。



住み慣れた地域に帰ると、入院中よりも表情が良く、活動的な生活を送っている方が多かったです。

